



一次情報をもっと活用できるようにしよう

平成26年度東京大学教養学部での石井洋二郎学部長は卒業生に向けて一次情報に立ち返って自分で検証することの重要性を話されたそうで、過去の大河内総長の卒業式での言葉を巡る間違いについて話されたことから話題になっています。

曰く「あらゆることを疑い、あらゆる情報の真偽を自分の目で確認してみることは、必ず一次情報に立ち返って自分の頭と足で検証してみることは、この健全な批判精神こそが、文系・理系を問わず、「教養学部」という同じ一つの名前の学部を卒業する皆さんに共通して求められる「教養」というものの本質なのだ、私は思います。」(東大ホームページより一部を抜粋)

全くその通りで、ネットの情報はもちろん、政治討論などでも一次情報に基づかない不毛な情報はたいへん多いと思います。まあ、結論はどちらでも良く議論を楽しんでいるだけのものも多いのですが。

では、実際にいろいろな問題について判断を下す時に一次情報を見ている人がどのくらいいるのでしょうか？我々が正しい判断を下すために必要な情報について本当の一次情報にたどり着けるのか、たどり着くのにどのくらいの時間とコストが必要かを考えると、一次情報に戻って検証することが容易でないと実感できます。

一次情報にたどり着き、一次情報自体の正確性を検証し、複数のデータを比較することができないと、自分で直接データをとることをしないで正しい判断に到ることはできません。

報道記事でも一次情報を重視した情報提供を是非行ってほしいものです。現在なら信頼性の高い一次資料、経済指標、事故統計、税収変化などにリンクをしっかりと張っておくことはそれほど難しくないでしょう。できるだけ原典の情報を見ることができて、さらに立場の異なった複数の専門家の解説をそれと明記してつける。

一次情報を示さず、曖昧に報道機関の意見を記載して、

そうなのかと感じさせる、あるいは無批判に信じさせようとする情報提供の時代はもう終わりにするべきだと思います。そうすれば冷静に自分で選択を行う賢い国民がもっと育つはずで。

さて、自然科学の論文は当然一次情報に基づく論説を行っている。しかし、よく考えてみると、十分生かしていないのではないのでしょうか？ 今の情報の組み立て方は本当の意味での一次情報(実験や観察の結果)を並べて比較できる形になっていないことに気がつきます。また、引用情報の正確性についても多くの場合は論文査読の過程では十分検証できていません。

ここで言う一次情報とは仮説の検証だけではなく、個別の実験データのことで、科学論文は仮説を証明するために個別のデータを集めて組み立てる形をとっているため、全く異なった視点から単純な結果だけを検索しようとしても通常のkey wordでの検索では出てこない。たとえば、抗体の使用情報や培養細胞の性質など、道具立ての情報を探すときに苦労します。また、類似の実験データでも全く異なった文脈に使われていると見つけ出すことは困難です。

また、方法などで引用文献をさかのぼるとdescribed elsewhereと書いている。しかし、結局どこにもちゃんと書いてないなどが起こりえます。査読者は結論に関連のない引用文献まですべてを2週間で確認することなど無理だからです。

データ処理技術が発展した現在でも、著作権の問題があるとはいえ、以前のように少数の論文データだけを比較することに留まっています。そこで、実験一つ一つがデータベースとして活用できるデータベースの再構成を提案します。

確かに当初は膨大な手間がかかることですが、たとえばGEOなどの遺伝子発現データと同じように、様々な個別の実験データをデータベース化することは現在なら可能ではありません。

そういったデータベースがあれば細胞の株の性質などが並べて比較できる、無駄な実験を省きやすくなる、実験結果の比較により論文の質の比較が可能で、結果の違いと実験条件の違いの関係に気がつくことができるなど今までの文献データベースでは難しかった利点が沢山得られると思いますが、open accessの雑誌からJ-stageでやってくれないかなあ？

(TF)